

18 双鏡 → 仁徳天皇
2839P
木内形 774 - 7/14

天斑駒 邪馬台国99の謎
紀上1218 116P
2,792 - 1/5

悪行 22P
魏志倭人伝 44P
403P
1763P

日夜の馬
雄略記 紀上484P
2262P
2810P

第四十六章 応神天皇 (下)

馬の渡来

魏志倭人伝には「三世紀中葉ころの倭国の様子が書きしるされてあり、

其の地に、牛・馬・虎・豹・羊・鵲（かさね）ささぎ無し」とある。

とはいえ、実際には、日本の各地で、牛や馬の

遺骨が発見されているという。

また、神話は考古学と関連しないが、素戔嗚尊の悪行の描写中に、

「秋は天斑駒を放ちて、田の中に伏す」と記されている。

—— 弥生時代当時すでに馬がいたことを推測させる。

しかし、日本の伝承も、記紀も、古い時代に、乗馬習俗が存在したとは伝えないし、

考古学的にも、今日まだそれを証明する遺物が検出されていない。—— 邪馬台国99の謎

扶余系殷民の子孫

松本清張、物産報、一一六、七頁参照

（縄文人・当初の弥生人・箕子の子孫達）は

騎乗の風習を持つていなかったのであらうか

（「縄文人・当初の弥生人・箕子の子孫達」は）
の東冶から渡来した時にも、騎馬習俗を持ち

込まなかったのであらうか（不明）

ともあれ、この東海の島にもとから馬が居
たにしても、馬に乗るといふ習慣

は無かつたようである。

（弥生時代ごろの人々は）馬具等を副葬しなかつただけなのかも知れない
（馬具等を副葬しなかつただけなのかも知れない）

（初代の神功皇后が出兵された年（二〇〇）でなく

て辛卯年（三三一）のことであつたらうか。

倭国に降伏した新羅王は、

「いまより以後長く、飼部となつて従いま

す。春秋には馬梳（馬の毛を洗うはけ）と馬

鞭を献上いたします。云々」

と言つた。

（「いまより以後長く、飼部となつて従いま

す。春秋には馬梳（馬の毛を洗うはけ）と馬鞭を献上いたします。云々」）
を以つて倭国に朝貢してきたという（神功皇后撰

Spile 2,792-3/5
最上のあひだ「鑑」

2,792^P-3/6

2,792^P-5/5

政前紀参照

■なお、

「ここにいう日飼部となる」とは

新羅が倭国の服属国として、飼部の役

割を果すという意味であり、降伏のしるし

の言葉として誓いをたてたのであろう

という。〔日本書紀〕〔日本古典文学大系

岩波書店、六一頁、補注九一七参照〕

なるほど、新羅王は、降伏の際の単なる誓

いの言葉として、日飼部になると言ったよ

うにも解され得よう。

■だが

に倭国三十余国中

●西暦二〇〇年（神功皇后の新羅征討の年）

の一国となった狗邪韓国經由、大陸の馬が

幾度も輸入されて、辛卯年（三三二）当時

の倭国本土内に多量に乗用馬の馬がおり、降

服した新羅王は、その事実を踏まえ

「いまより以後長く、飼部になって従いま

す。云々」

と述べたようにも思われる。

「倭の五王」和歌森太郎 騎馬民族国家 青尾 2792^P-4/5 小林 1077^P 馬匹 1815^P 当然ながら 2793^P-1/4

恐らく

西暦二〇〇年以降、狗邪韓国から

倭国本土へもたらされた。乗用の馬は、子を

生み、長い長い年月をかけて少しずつ増えて

いったのだらう。と推察される。

言うまでもなく、馬は、瞬時にその頭数を増やし、一

般化するものではない。

のである。

乗馬用の馬が導入されてから、年月を経へ

た後、倭人社会に広くゆきわたるま

での馬匹数になったものと想定される。

因みに述べると、騎馬民族説の主張者

である江上波夫氏がまず問題にしたのは、弥

生文化・前期古墳文化と、後期古墳文化との間

には、顕著な性格の差違が存在する。ということである。

江上氏によれば、

「心神陵・仁徳陵などに代表される後期古墳

は、大陸的な要素が濃い。副葬品にしても

前期のが宝器的・象徴的・呪術的な意義のも

のであるのに、後期のは武器や馬具など実用

の

はひ 馬匹 小林 1077' 見張る 2129' 2,792' - 5/6
馬のこ 松 1815' 目を大きく開いて見る。

⑦ 2792' - 3/5

的なものが多くなる。檀のでき方も大陸的である。

という。〔倭の五王〕和歌森太郎、文英堂

一三七頁参照

① たーかに

へ応神朝末、仁徳朝ころの倭国には、す

でに多数の馬がいた。

に相違ない。(写真図版 477 参照)

② ーかし

へ応神朝末に突然、数多くの馬が大陸から

我が国へやって来たというわけではなく、

西暦二〇〇年以降に我が国へ運ばれてきた馬の

子孫が増えに増えて、応神朝末、仁徳朝ころには

目を見張るばかりの頭数になつていたのであ

ろう。

と解される。

③ また

「応神朝末に、多くの馬が続々と我が国へ

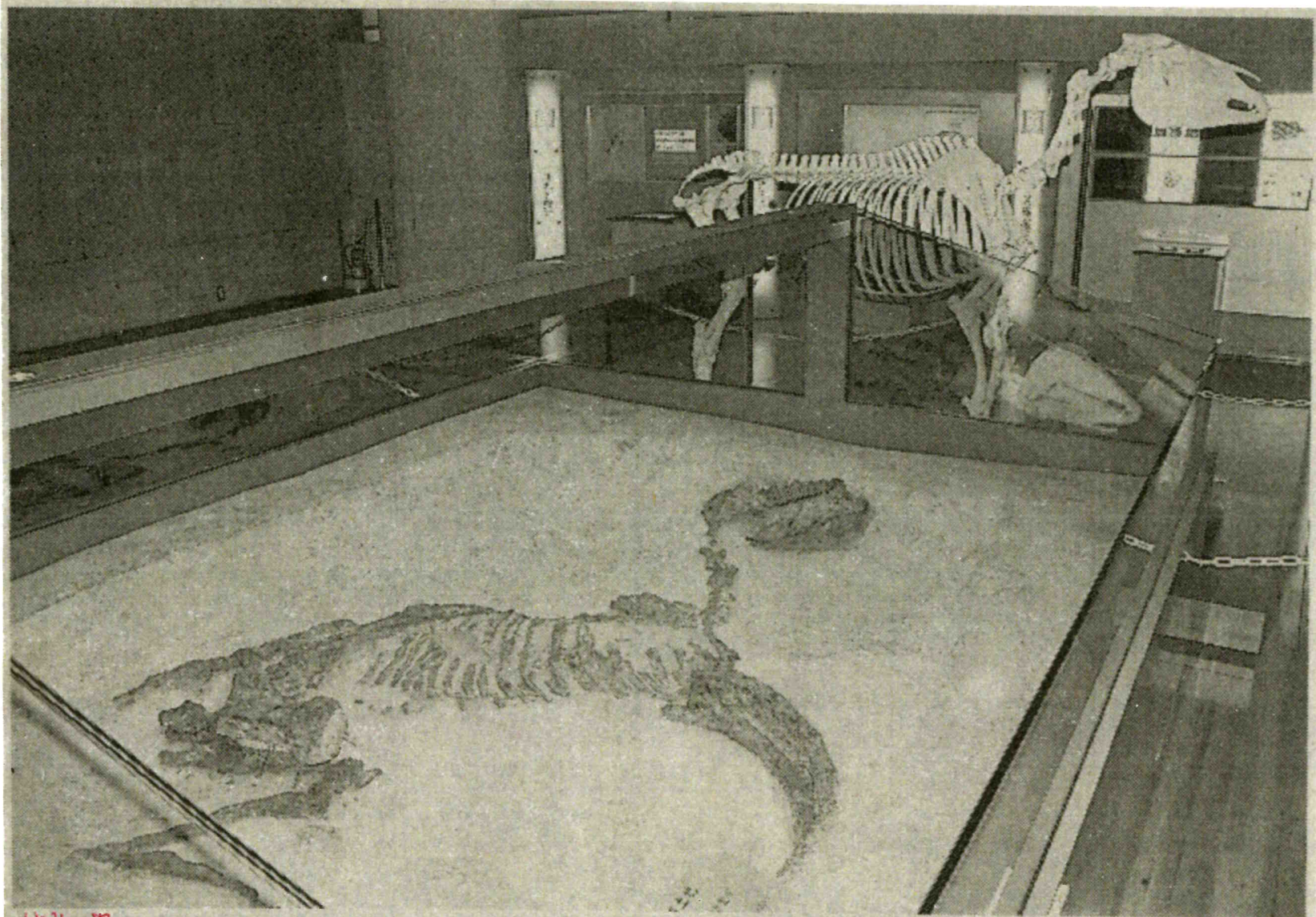
渡来し、そして直ぐ、乗馬の風習が倭

国の支配階級のあいだで一般化した。

とも考えにくいように思われる。(乗馬は、そんなに簡単なものではないからである)

2,792^P 6/6

- ・カラー
- ・左頁の上半分に大きく掲載下さい。



14Q9

写真図版477

（とみ）
部屋北遺跡で出土した古墳時代の馬の全身骨格。後ろは復元された骨格＝大阪府河南町の府立近つ飛鳥博物館

13Q9

12Q9 『朝日新聞』平成26年(2014)1月22日付夕刊〈古墳時代^{キョフキ}の馬の骨〉

（しょうなわ）（とみ）
・大阪府四條畷市の部屋北遺跡などから、5～6世紀の馬の骨や馬具が多数出土。多くの馬を飼育^{（いひ）}していたことが分かっている。

7/5^P

見るまに小さくなつてゆく。
倭国の都から四方へのひろる街道や、草原な
どには、馬を巧みに操って駢けて行く貴公子
達の、颯爽とした姿が見られたに違いないで
あうか。

H30(2018)7.13(金)~7.14(4回)

こうき
皇紀 731

20

41-394 53 394
15-368 53
1-354 53

2794-2796 1年

394 53 41-53
368-15=53
354-1=53

紀土 370?

1922 IF

284年 紀土 486

2,793-3/4

紀土 354-1=53

三六六(三七五)であった可能性がある。近肖古王(在位

と解してみたい。

この物語では、

へん神紀には、

と記されている。

と想定すると、

と記されている。

と記されている。

と記されている。

と記されている。

と記されている。

と記されている。

コクヨ ケー20 20X20

新ヤ(1)-408下

368 23 1
-346 1
22 22

718

331年 三韓征討

紀(連)1926

H4.4.20(用) ④2803^{3/3} 勅め及1193²
H11.1.17(用)~1.19 ④164 末 紀上371~2 2行

紀上372² 2行

改行

2,793^P-4/4

④2671^P 經典 紀上371^P 国19 經書・典籍のこ

けいは 小林 754⁰ 聖人の書 四書・五經 經書 754⁰ 聖人の書 四書・五經 經書 754⁰ 聖人の書 四書・五經

南の地という(第四十五章)天下を治めておられたの

輕島の明宮(奈良県橿原市大輕町、臥傷山東)

兄弟 援 兄 媛 神朝末代の倭王は、先述の

同十六年二月条参照) 阿神紀十五年八月六日条。

菟道稚郎子は、王仁を師として、諸典籍を

仁が来朝した。和通吉師は論語十卷、千字文一卷を

馬を奉った阿直伎は、亦よく經典を読んだ

さらに、倭国へ儒教がもたらされた。

経書・典籍 記和通吉師とある

阿知吉師

百済から王

719^P

紀375^上注9
紀230^上注2707-5/5
②2708-1/2 2,794-1/6
紀374^上

375^上-22=53
354-1=53

紀375^上 紀374^上
②861-1/2 ②2707-5/5
注え。

の項において既述)
ある時、応神天皇は難波の大隅宮へ行幸さ
れた。(以下) 応神紀二十二年(系参照)
尚、安閑紀二年九月系に「難波大隅島」と記さ
れてる。摂津志には「西成郡大隅宮、古蹟在(西大
道村)とあるが、地名辞書は「西成郡北中
島東部(今、大阪市東淀川区東大道町・西大
道町)とする。(「日本書紀」日本古典文学大
系、岩波書店、三七五頁注六) 帝國地名辞典(大田嘉三郎)西成郡(系参照)
さて、天皇が高臺(高樓)に登つて遠くを
御覧になつておられたとき、妃の兄媛は西方
を望みながら大いに歎いた。
兄媛は、吉備臣の祖御友別の妹である。(応
神紀二十二年三月系参照)
吉備臣は、大吉備津彦の弟、若日子建吉備
津彦(稚武彦)の後裔であつて、姓氏録、右
京皇別「吉備臣、稚武彦命孫御友別命元後
也」と見え、三代実録、元慶三年十月二十二
日条の「印南野臣宗雄の上言に「吉備武彦命弟
二男御友別命」云々とある。(「日本書紀」上) 日
本古典文学大系、岩波書店、三七五頁注九)

⑤ 2709ⁿ-5/5

1ばろ
暫く 1007^p

2,794^p-3/6

宇治社

ひたひた
悲嘆 1870^p
嘆く 1655^p

⑤ 2709^p 3行

改行

備津日子の項において既述

●もし仮りにて大吉備津彦は、その直系の
孫が幾代目かの応神天皇を襲名したのであ
れば、―――応神天皇と吉備臣とは、極めて近
い血縁関係にあつたこととなる。こうした親密
さから、兄媛は応神天皇の妃になつたのかも
知れない。
■応神天皇は、高臺（高樓）の上で悲嘆にく
れてゐる兄媛に、
「何でお前はそんなに歎いてゐるのだね」
と優しくお尋ねになつた。
■兄媛は、
「この頃私は父母を恋しく西の方を遠く
眺めていたから、ひとりでに悲しくなつたの
です。どうか暫く帰らせて親を訪ねて下さい
と言つた。」
■天皇は、兄媛の親を思ふ心が篤いのを賞め
て、
「お前は両親を見ないで、もう何年か経つ
てゐる。帰つて親を見舞いたいと思ふのは当
然だし、
と語り、そして許す水た。（第四十四章へ大吉

兄え媛めいを乗のせて
い
る
船ふねが、
遠とく
く
入い法はうさ
っ
て
ゆ
く

その様子ようすを高台たかいから望みして下おろ底そこ神天皇かみみかどはこ

う
お
歌
い
に
な
っ
た。

あは
淡路島 しま

い
や
ふたなら
二並
ひ

あ
小豆島 しま

い
や
ふたなら
二並

ひい
寄
ろ
ー
キ
鳥
鳥
誰
か
た
去
小
放
ち
ー

吉備きびなる妹いもを相見あひみつるもの

（底神紀二十二年四月条参照）

*た^たか^か淡路島と小豆島とが二並びーているように思えない。

定かでないか
この物語において
こう

あまぐさ
かみ
あはち
そうとう

① 天草の
上鳥
かみ
は
す
と
波路
鳥
に
相
当
す

な	天
お	草
	の
	上
	真
	に
	口
	概
	本
	明
	乃
	か
	あ
	り
	ス

あ	あ
る	真
い	に
は	口
、	沙
日	本
あ	市
は	心
ち	力
各	あ
島	三
二	
い	
う	
島	
の	
ふ	
た	
下	
人	人

沙
 路
 真
 ち
 と
 い
 う
 道
 の
 各
 片
 本

へ
 河
 皮
 国
 の
 欠
 へ
 ち
 す
 ら
 へ
 ある

易	二	下	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

2,794^P-4/6

アキ
アキ

・ 尚^{なお} 往^{おう}古^こに^は、四^し国^{こく}の^そ統^{とう}稱^{しょう}と^いて^は阿^あ波^は国^{こく}と^も伊^い予^よ之^の二^{ふた}名^なの^い島^{しま}と^も呼^よんだ^{よう}であ^る。

照^{しょう} 応^{おう}神^{じん}天^{てん}皇^{わう}は、

・ ア^あハ^は路^ろ島^{しま}と^アハ^はの^こ国^{こく}と^か二^{ふた}並^{なら}び

・ 小^こ豆^{まめ}島^{しま}と^吉備^{きび}見^み島^{しま}と^か二^{ふた}並^{なら}び

・ 一^ひつ^つて^いる。

・ 一^ひつ^つて^いる。^{はふ}記^き紀^きの^こ国^{こく}生^{せい}み^き糸^{いと}に^き記^き載^{さい}さ^いし^てい

・ 一^ひつ^つて^いる。^{ほか}の^こ小^{せう}さ^な島^{しま}々^も、^{みな}皆^{みな}二^{ふた}並^{なら}び^て

と^お考^{こう}え^なな^った^のか^も知^しれ^ない。

・ 一^ひつ^つて^いる。^お応^{おう}神^{じん}天^{てん}皇^{わう}は、^{つぎ}次^{つぎ}の^{よう}な^い意^い味^みを

込^こめ^て歌^{うた}め^たた^ので^あら^うと^察せ^られ^る。

元 小林 795^p
胞 紀上 552^p
紀上 81^p

見子 元 721^p
② 2779^p - 1/2

2,794^p - 5/6

記(建) 31^p
紀上 85^p

② 2707 - 5/6 紀上 374^p
「小町」 15^p 紀上 374^p

胎盤 天草の上島・下島のどこか
天の御虚空豊秋津根別り本州を生んだ
路洲・淡洲を以て、胞衣(胎児を包んだ膜)および
伊奘諾尊(男神)は、合為夫婦して、淡
ついで、次のように解釈してみたい。
ところて、神代記・神代紀の国生みの物語に
吉備の兄媛を。せつかく親しんでいたものを
並んで、私に、私は独りにされてしまった
私が立ち寄りたような島々は、みな二つ
あろうという(広辞苑へ子・見参照)
建日方別)も二つ並んで、小と見とは同源で
並んで、(神代紀上第四段一書第六参照)
小豆島(大野手比売)と吉備の兄嶋
淡路洲と淡洲(阿波国)との二つが
大島
淡路島 いや二並び 小豆島 いや二並
寄ろしき嶋嶋 誰かた去れ放ちし
吉備なる妹を 相見つるもの
た船が去って行くのを御覧になり、歌をおよ
みになった。
応神天皇は、高台におられて、兄媛を乗せ
た船が去って行くのを御覧になり、歌をおよ
みになった。
淡路島 いや二並び 小豆島 いや二並
寄ろしき嶋嶋 誰かた去れ放ちし
吉備なる妹を 相見つるもの
た船が去って行くのを御覧になり、歌をおよ
みになった。
淡路島 いや二並び 小豆島 いや二並
寄ろしき嶋嶋 誰かた去れ放ちし
吉備なる妹を 相見つるもの
た船が去って行くのを御覧になり、歌をおよ
みになった。

H7.8.17④

→

平氏社の地図29Pにある

↓ 小さな島

記③32

2,794-6/6

紀上8P

記③31P

記③30P

阿波口はダブル

紀上85P
記③31P

2794
-3/4
右側

(*)

2795
-3/4

丸が男、ひが女

といえそうだと

(神代紀上第四段一書第六参照)	
次に、伊予之二名島(四国の総称。もう一	つの総称として「阿波国」ともいう)を生んだ
(既述「古事記」新潮社、三〇頁、注四参照)	
次に、九州を生んだ。	九州と九州が対になっているのだろうか。
以下、次のようである。	
(1) 伊岐島(天比登都柱)と津島(天え狭手依	比売)を生んだ。(記)
(2) 隠岐洲(天え忍許呂別)と佐度洲とを、双	子として生んだ。(神代紀上第四段本文、一
書第六、一書第八)	
(3) 吉備の児島(建日方別)と小豆島(大野手	比売)を生んだ。(記)
(4) 大島(大多麻流別)と山口県大島郡の屋代	島(天一根)と大分県国東
半島東北沖の姫島(五島列島)と	知訶の島(天え忍男)と五島列島(天
と雨見の島(天の雨屋)と五島列島の南の	男女群島(を)を生んだ。(記)
このようにい	
「小さな島々は、二並びして	

阿波口凡記491⁷ 記(黒)30注4⁷ 路次 小村939⁷ 道すに 2,795^P-1/4 (こと) 改行 ②164⁷

蛇足ながら述べる、

①その昔、倭人達は、陽物(葦牙)のよう

な形状をしている宇土半島の西方に二並びしてい

る。天草島^{あまぐさ}の二つの島のうち、

・西側に位置する大きい方の下島を、淡洲^{あはのしま}島

・東側に位置する小さい方の上島を、淡路^{あはぢのしま}島

と呼びならわしていたのだろうか。

②そこで、九州地方から近畿地方へ移り住

んだ人々は、陽物に見立てることの出

来る和泉^{いずみ}山脉の西方に二並びているように

も見てとれる二ヶ所を選んで、

・西側に位置する大きい方の島を、淡洲^{あはのしま}島

(今の四国の総称を「阿波国」ともいう)

・東側に位置する小さい方の島を、淡路^{あはぢのしま}洲

(淡洲への路次にある島、今の淡路島)

と呼ぶようになったのではなからうか、

と定かならないものの想像される。

・とはいえず、四国のうち、天草下島に相当す

ると思われる小範囲を「阿波国」(現在の徳

島県)と呼ぶ場合もあったのだろう。

第十章「蘇奴国」参照

■なお、日伊予二名嶋（記）・日伊豫二

名洲（紀）は、四国全境を指しているが

フタナの意味は不詳である、という。

（「日本書紀」上）日本古典文学大系、岩波書店、ハニ頁、注三三参照）

■定かでないが、

大倭国（九洲地方）の人々は、四国のこと

を日伊豫国（と称した）と称した。

・しかし、日辺日本国（近畿地方）の人々は

四国のことを日淡洲（阿波国）と称した。

・このように、二つの名をもっていた四国は

時として日伊予と阿波の二名嶋（とも呼ばれ

二名嶋（伊豫二名洲）とも称されるように

なった。

という経緯が

想察される。

なりことである。

（*）

まどがしま
佐渡島 896'

2,795' $\frac{3}{4}$

輪を 38'
2758'

* ② 2650' - 3
茅の輪状の丸を
男とみなすのである

● 概略丸い形状をしてゐる「伊岐島」(壱岐)
島」と、「隠岐洲」(隠岐島)とを対比させ
て、共に男の島とみなした。
● 二つの細長い島の端をくっつけ合わせたような
形状をしてゐる「津島」(対馬)と、「佐渡
洲」(佐渡島)とを対比させて、共に女の島
とみなした、
のであろうか。
● 伊都国(現在の糸島半島)の沖に「壱岐島」
(男)の沖に「対馬」がある。
● 一方、伊都国に相当する「出雲国」(現在
の島根半島)の沖に「隠岐島」(男)の
の沖に「佐渡島」がある。
と言えよう。
* ちかしたる「陽陰が結合した際の断面を
示唆してゐるのかも知れない」

2,795^P-4/4

2707^P-5/5
紀上375^P

2707^P-3/4

紀二十二年九月条参照)

※

「私も、吉備国へ行こう」
難波の大隅宮を後にした。応神天皇は、淡路島
小豆島を経て、吉備の、葉田の葦守宮に
行幸された。(第四十四章)大吉備津日子に於て既述
兄媛のみならず、応神天皇にとつても、吉
備国は懐かしい古里だったのであろう。
葦守宮に至ると、兄媛の兄である御友
別(吉備臣の祖)が謹惶まり待奉った。(応神

条 東洋火斧 358° 小井末 98° 卷
 古代朝鮮 69° 15分
 ④ 2554P

辛卯年（三三一）に倭国の臣民となつた新羅
 はすでに倭国から離反しつゝあつた。（第四十
 四章へ銅鐸の原料の入手先の項、日三国史
 記の新羅本紀参照）
 三七七年 新羅は高句麗とともに、秦
 （リ前秦）へ入朝した。（「古代朝鮮」井上
 秀雄、日本放送出版協会、七二頁参照）
 しかるに、応神天皇崩御（応神四十一年、
 西暦三九四年）の十三年前、三八一年九月の
 こゝであつたらうか——高句麗王は使者を
 遣わし我が国に朝貢してきた。
 ところか、その上表文には「
 「高麗の王が、日本国
 日、四日本国の意で
 あらうか」に教えるし
 とあつた。

外 かい
夏 ゆう

辛卯年（三三一）に倭国の臣民となつた新羅は、すでに倭国から離反しつゝあつた。（第四十

四章）銅鐸の原料の入手先の項、曰三国史記に新羅本紀参照

三七七年 新羅は高句麗とともに、秦

井上(生) 331^p 567^p 2,796^p - 2/2

394 死 41^年
384 31
10 10

宇治谷上 204^p 紀上 376^p
井上(生) 330^p
2820^p 月文

天孫の荒道稚郎子(後の宇治天皇)播磨国
風土記、揖保郡大家里条(は、その表を讀
んで怒り、表の書き方が無礼だと高麗の使を
責め、そしてこの表を破り捨ててしまわれた
(応神紀二十八年九月条参照)

さらに、応神天皇崩御の十年前(三八四年
か)には、二人な出来事があった。
新羅の調の使が、武庫(兵庫県尼崎市の武
庫川河口)に宿泊していた。
折しも、新羅の宿泊所で突然の失火があ
り、たちまち燃え広がっていった。
そして強風にあおられた火は、武庫水門に
集まっていた五百艘もの船に及び、このため
数多くの船が焼けた。(倭国の船)

そこで、新羅人を責めた。
新羅の王は、事の次第を聞いて大層恐懼し、
大いに驚いて、ただちによい匠者を貢上した
という。(応神紀三十一年条参照)

(*)

記(生) 191214
2544^p 井上
この人
貢進した
2193^p - 44
13^年

コケヨ ケ 20x20

紀上 391^p 28

731

二の頁、末「事」
出来事はやめ、
事件ではおあげさすき。

④ 2550^P-1/3 同文

おとい
陥る
3/31

④ 2549^P-1/2 末

2,797^P-1/3

④ 2549^P-1/2

そうせんえ
駭然 1291 記(2) 203^P
394年9月9日

④ 2546^P-4/4
2549^P-3/2

「すてに」
④ 2796^P-1/2
78行

すてに、この物語の第四十二章へ高句麗と
百濟との絶え間のない攻防の項において述
べたように、
神天皇薨去(三九四年九
月九日(記)の直前当時、海北の朝鮮半島は
駭然とした動乱の最中であつた。
■ 三国史記にこう記されている。
① 三九二年七月、高句麗の玄闡王は、四万
の軍隊を率いて、百濟の北部国境へ侵入し、
石岬城など十余城を陥れた。
② 同年(三九二)十月、玄闡王は、百濟の
関彌城を攻めおとした。その城の四方は絶壁
に、海水に取り囲まれていたが、玄闡王は
軍隊を七道に分け、二十日間攻撃し、ついに
陥落させた。
③ 三九三年八月、百濟は、高句麗南部の国境
へ侵入し、関彌城を包囲した。高句麗軍は、
籠城して固守した。百濟軍は、軍糧の補給路
が途切れたので引き返した。

となつており

きつだい
末代の子孫
大カニ 1126

2,797^P-2/3

天つぎ
改行

大カニ 1691^P
2550^P-2/3 精強な

④三九四年七月、百濟が水谷城下へ侵入して来たので、広開土王は選り抜きの騎馬隊五千人を率いて迎え撃ち、二水を破った。残りの敵も夜になつて敗走した。

⑤同年(三九四)八月、高句麗は、国の南部に七城を築き、百濟の侵入に備えたという。

心神天皇の胸中に渦巻く苦しみは、甚だしかった。

「ううむ。どうしてくわようぞ」心神天皇の胸中に渦巻く苦しみは甚だしく

祖禰(神功皇后や前代の心神天皇)の大きな遺産というべき百濟の地の北部一帯が高句麗に奪われ、新羅が倭国から離反してゆくのは、末代の心神天皇にとって、無念以外のなにものでもなかった。

しかし今、倭国は、日本(日本国)の統治に、多大

H4.5.31 (日)
H11.2.23 (火)

ニ

2,797^P-3/3

おこす 294 探索 2188^P
探索 456777 探索

*

の力を割かなければならなかつた。
日迎回(日迎日本国)の統治を疎かに
して、おいて、海北の国(朝鮮半島)の鎮撫の
みに力を注ぐという訳にはいかなかつた。
その小では我が国は、この事態にどう対処
すべきか。
自らの答を求めての応神天皇の探索の日々
が続いた。
「日迎回(日迎日本国)を興すと同時に、
海北の国々の乱小を鎮圧するには、――
一体、どのようなのだらうかし、
――そんな時、応神天皇はついに、
――あることを決断されたようである。
――しかし、その詳細について述べる前に、ふ
れておかなければならないことがある。